石櫻新聞

発行所
盛岡市長田町
岩手高等学校
岩手学校会
出版委員
責任者 藤原信一
印刷所
山口活版

メガネの
水晶堂
盛岡市中の橋通一丁目
中央通映画街
盛岡ステーションデパート・サンビルデパート

校長を囲んでの対談

生徒会代表ら活発な質問

冬休みが明けて四・五日した一月二十一日に、幾人かの生徒会の代表者が校長、教頭に対し、日頃生徒が疑問に思っている問題をお聞きした。

当日は、授業終了後、代議委員や常任委員の十数名が、意気軒昂し校長室の扉をたたいた、その後、校長室の真中に置かれたテーブルの回わりは血気盛かんな若者でいっぱいになった。そして直に授業料値上げ問題の質問にはいった。

生徒側から「我々が岩中にいたとき、岩中にいる者は高校にはいっても授業料は上げないと、おっしゃったように記憶しますが、現に我々が岩高に入学した時に上げたのはどういう訳ですか。」

それに対し「そんなことは言わなかったよ。それは何かの聞き違えであろう。ただ学校としては、高校に入学した時と卒業する時との授業料は同額であるように心掛けている。でないと入学のときの看板に偽りがあるみたいなのでね。昔は岩中と岩高は同額だったんだが、おりからの物価上昇でもって、先生たちの給料も上げなければならないのでしかたなく授業料を上げたんだよ。」と学校側。

「じゃ授業料のほとんどは、先生方の給料にいくんですか。」と生徒側

「その通りだよ。教材の方にはわずかなんだ。辛い、うちの学校では教材に恵まれているのでね。公立の高校は生徒数に対し46％恵まれているのに対し、うちでは83％恵まれているんだよ。それに、利用加何にかかわらず、うちの図書館の本の数は東北でも一、二だろうね。うちでは二万三千冊ほどあるのに比べ、図書館の歴史が古く数多く保管していると言われる盛岡二高でさえ二万冊になってはいないだろうね。」と。

先ほど我々がはいってきたとき、ストーブにジャンジャン入れたマキが今になって、最大に効果を上げて、暑くなってきたため、今や校長室は、熱気と興奮でいっぱいになった。にもかかわらず、両先生はタバコを手にしながら悠長な話ぶりであった。

「じゃ三田さんには学校からどの位いっているのでしょうか。」と生徒側。

「そりゃ逆だよ君。三田さんの方から金銭的に寄付されることはあっても、学校の方からは一銭たりともいっちゃいないんだよ。学校を建てるときだって、プールや図書館のときだって三田さんからの寄付でやったんだよ。生徒がそんなふうに考えていると第一三田さんに悪いよ。そういう誤解が、生徒と学校側がうまくいかない原因にもなるんだよ。そこんところを間違えないようにしてくれ給え。」と学校側。話題は生徒心得に移った。

「学校では、岩高生をどのような者であってほしいと思ってますか。」と生徒側。

「それについて具体的には、いつだったかの石桜会誌に載せたんだが、その具体的なものを忘れたのだが、ここでは大きい意味で言っておく。それは質実剛健であれと言いたい。それは何もバンカラにしろという訳でもなく、かと言ってオシャレになれと言うのでもない。つまり、質素でありながら身心共に充実していて、学生としての態度を取り、卒業してからは何処へ出しても決して引けを取らない実力を持った者をと、考えてるんだよ。」

「生徒心得を作ったことについてお聞きしたいんですが。もう一つ服装のことですが、体が大きくなって襟がかけられないときは、掛けなくてもしかたないんじゃないですか」。と生徒側。「生徒心得は君たちの先輩が、外国の素質ということから参考にしたり、質素ということからはずれないように作成したものだ。中には古いものもあるが決して悪いことは書いていない。それに、当然あれには、先輩の情熱がこもっている。良いことも書いているので今後も守っていくように。襟のことであるが、襟は必ず掛けるようにしてくれ。もし、掛からなかったら、そこに布をつぎ足してでも掛けるように。襟を掛けることは、学生の身だしなみとして当然のことだからね。」

両先生は喫むのを切らさなかった。

話題は変わって「岩手山登山はなぜやめたんですか。それに年に一度位は、全校生徒でもって、前のように遠足に行くようにしたらどうですか。」と生徒側。

「私も全校生徒で遠足に行くことは賛成だ。こういうものは親睦のためにはいいへんいい。昔はバスなどに乗らず、歩いて行ったもんだよ。歩くことに意義があるからね。だが文部省で決めた35週間の授業日数を確保しなければならないことと、近年学校の行事がふえたことで、岩手山登山はむずかしかったんだよ。でも皆で何かをするということには、大いに賛成だし、やりたい。特に山ほど精神の鍛錬になるものはないからね。」

このほか、また意見や質問がいくらかあった。最後に学校側より生徒への要望があった。

「年を取ってから後悔しないようにもっと勉強するんだよ。それには、まず、授業態度を改めなければいけないね。今度の日報テストを見ても、近年になく不調だと私は見ている。もう一つ、物を大切にしてほしいね。それから、私のところに、議論しにやってくるのは結構だ、どんどん来てくれ、ただ、そのときにこっちの言うことは素直な気持で聞いてほしいね。」

吉田先生

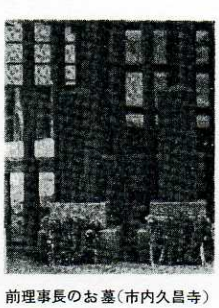
東南アジアに向かう

生物担当の吉田先生がこのほど東南アジアに、教育事情視察のため一月十五日日本をたたれた。

一行は全国から選出された教員、教育委員の五十名で、視察の主な都市は、プノンペン、シエムリアプ、シンガポール、クアラルンプール、バンコク、香港、台北、沖縄等である。

「日本が東南アジアに、文化、経済等いろいろな面で援助しているが、はたしてあちらでは、日本をどう見、どのような期待をかけているかを、アジアの同胞として、各国の教育事情や生活にしかに触れ観察して来たい。素顔を見てきたい。」と先生は語られて出立された。

桜花



前理事長のお墓（市内久昌寺）

昨年十二月三十一日に久昌寺へ前理事長の墓を御参りに行ったとき、その数が年々少なくなってきたことに気がついた。全学年を通じ十名たらずには誠に驚き、何年か前の、私が岩中に入学した当時と比較し（その頃も少なかったが）もっと少なくなってきていることに情なく感じた。

墓の前に立ち、ふと考えたことがある。それは、近年の生徒会活動やその他の不活発と、これが関係があるのではないかということである。生徒会活動の不活発は、クラス全体の盛り上がりが薄いことに起因している。それはとりも直さず、生徒各人がバラバラであることを意味する。そのバラバラが前理事長の墓参にも反映しているのではなかろうか。何もここで、墓参を強調しているのではない。御参りというものは、自発的行為から生まれるものである。それに、家で机に向かっている方が有益であるのは言うまでもない。しかし三十一日にもあなたの全部が全部勉強していたとは思われない。「寒い中を行くのは馬鹿ぐさい。」と思っていたのがほとんどだと思う。そんなときに、きょうこそは友といっしょに、そして先方といっしょになって御参りしようという、学校全体の親密感を盛り上げようとしてもいいはずである。その親密のために、自身の消極性を超越し、足を運んでも決して馬鹿らしいことではないと思う。墓参ということを変に意識せずに、素直になって、友が行っているなら俺も行かなくては悪いという、良い意味でのお付き合いがあっていい。

年に一度や二度は、クラスの友といっしょに心静かに手を合わすことも大切である。特に、若者の衝動的行為が続出し、悪い結果を生んでいる今日、もっと自身を知り、心の安定を保つことが大事である。

寒い中を駈け付け身も心も引きしまったところで、心静かに手を合わせ、敬虔な祈りをささげる。それと同時に、今年一年をふり返り、よく反省をし来年の心構えをする。こういうことは、地味ではあるが、本当に大切なことではないだろうか。自身の成長のためにも、生徒の団結のためにも今年は実行してほしい。

ポルル

あるクリスマスの晩

生活委員会が孤児院を訪問

生活委員会が、行なっているパン販売が先ごろまでに、二万円程の利益をあげた。それでそのお金を、良いことに使おうということで、加賀野にある施設（青雲荘）に、それを贈った。その時の模様を、報告しましょう。

昨年十二月二十四日、この日は年に一度のクリスマスイブ。生活委員が、この日に贈りものをしようと決めた。この日は第一日目の冬期日報テストがあった為に、出発したのは五時過ぎであった。冬の五時はすでに暗く、少し前から白いものがパラつき、まさにホワイトクリスマスの、感じにぴったりだった。ネオンサインのまたたく、にぎやかな町の中を突き抜けてやがて青雲荘についた。そこには大きいが、しかし貧弱な建物が、寒々として立っていた。玄関の前には、自営隊のジープが、とまっていてやはり、この人達も、青雲荘の子供たちに、メリークリスマスを言いにきたらしく、中からは子供たちのうれしそうな声にまじり、大人の太い声が、聞こえてくる。やがて自営隊の人達も帰り、それとすれ違いに我々が入った。初め事務室で、あちらの先生に、お話を伺った。

「この青雲荘ができたのは、明治三十六年です。それだけここの歴史は古く、いままで多くの人々を、送り出してきました。で、この経営資金は、国からや、市町村から、与えられるのですが、とてもそれでは、経営が、経済的に余裕がないんです。今ここにいる子供は、幼児が四人、小学生が十五人、中学生が十八人の合わせて三十七人です。そして指導員や保母さんが七人おります。ここには生まれてすぐ両親と死別した子や、家庭が極貧なところの子が、つれてこられます。特に物心がついてから来た子は、ひねくれていて手が付けられないんです。だからそれを素直な子にするには、並大抵のことではありませんが素直になったときは、保母としてまた指導者としての生きがいみたいものを感じます。このような施設で育てられている子には、いじらしい位に独立心があるので、社会に出てからも立派にやっています。

今年は、四人がここで中学を卒業し、巣立って行った。四人とも、市内にそれぞれ就職して、元気に働いています。今までに、この施設を出ていった者の中には、東京方面で成功して、ぶん転々と職を変えたり、ぐれてしまったりしていることでしょう。だがその原因の一部は社会にあるのです。人間皆平等だとはいっても、社会の目は冷たく、施設を出た子は、施設の子として見ているのです。そういうふうに見られるのが、何よりつらいと、ここを出た子は、時々もらします。特に女の子の場合は、その子が施設を出た子だとわかると結婚話が破談になることが時にはあります。だから社会の人々が、施設を出た子だと言って、差別しないようにしていただきたいのです。」と、その先生は、しんみりと語られた。でも「正月などには、ここを出て遠くへいった人達が顔を見せに帰ってきてくれるのがうれしい。」と顔をほころばせながら話された。

ここで、話が一段落したので、子供達の集まっているところへ行くことになった。我々が、子供達の食堂へ、入ったとき、さっきの話にもあったとおり、ここの子供達は恵まれていないなあと、特に感じた。それは建て物が、新築してもいくらいに古くなっていることや、設備が、不充分であることや、壁の一部分が落ちていて、そこにきようはクリスマスのせいか、半端なカーテンでごまかしていることからも想像された。しかし、きょうは、クリスマスとあって、部屋の中はいろいろなもので飾られていた。部屋の満中には、ストーブが、赤々と燃えていて、その隣に、きれいに飾りつけられ、豆電球スツリーが、かわいらしく台の上に置かれてあった。そのストーブやツリーを囲むようにテーブルが置かれてあり、それを間に、はさんで子供達が向かいあって、にぎやかに食事をしていた。

生活委員会の紹介があってから、二万円相当の贈りものである、本やアイスクリームやお菓子やマフラーが委員の手から贈られた。子供達みんなで、歌をきかせてくれたり、ある子の独唱があったりしてから、スケッチブックをかかえていた絵画部のT君が、希望者の似顔絵を描いてやることになった。その間残りの委員は、子供達の中に入り、あれこれと質問をしていた。質問に応じたりしていた。

最後に我々が校歌を歌ったら、それに対して割れんばかりの拍手が起こった。

帰る時までT君は、子供たちにとりかこまれ、すっかり人気者になってしまった。帰りに玄関で見送ってくれた子供たちに手をふり、外套のえりを立て、首をすくめて我々は、雪の夜道を帰路についた。

十二月二十七日には、青雲荘の子供たちを、映画に、招待した。その時の費用は生活委員会からと、三Aの生徒並びに、三Aの生徒が寄付金を募集して歩いたお金を用いた。

この欄をかりT君の生徒並びに寄付に協力してくれた生徒諸君に、心から厚くお礼を言わせていただきます。

激動の文化大革命

二D　上野英夫

いま中国全土を混乱のウズに巻きこんでいる、「文化大革命」は、一般に毛・林主流派のクーデターとみることができるが、最初は文化界・演劇界からいわゆる、文化整風という形で始まった。

しかし、その時点では、それほど大きな矛盾はなかった。それが現在のような、はげしい政策論争からんで、両派（主流派・反主流派）の隔たりが、ますます深くなった。

毛沢東主席が、文化革命で自分及び革命自体の後継者を、中国全土に広範に作ろうとしたので、政策論争とからみあって、さわぎがあまりにも大きくなりすぎたのだと思う。

一九四九年の解放以来、絶対的な権力をふるってきた毛沢東主席が、五八年に急進的な「大躍進」政策にのりだして失敗した。これで中共は、かなりひどい経済危機に突入した。そしてその政策批判をした、彭徳懐国防相は更迭されて、現在の林彪に変わった。しかし、危機突破の大仕事は「穏歩・漸進」主義の劉少奇軍もこの手中にある。一方この調整政策を、まんまと成功させて、毛から国家主席の座をゆずりうけ、毛は党に引退して政局を見守った。しかし、毛沢東主流派が、気がついてたら、反毛派が、各実務機関、地方の実権を、握っているという状況が現われていた。そして経済危機も脱した、六二年以来、毛沢東は巻き返しを開始した。その中共の内部の対立が、次第に激しさを加えて、今日の状態にいたったのである。

前にのべた、主流派とは、毛主席を中心とし、林彪国防部長、陳伯達文革小組組長、江青文革小組第一部組長（毛沢東夫人）康生中央政治局常務委員などの急進派で周恩来首相、陳毅外相なども含まれ、解放余儀なくされた、五九年ころ、主導権をにぎって劉鄧派は、国内では合理的な経済政策、国外では、ベトナムをめぐる世界共産党の統一戦線方式、つまり対ソ協調の方向に傾いたことに、主流派が政治優先主義で抵抗したのが、文化革命でないかとさえいわれている。

この文化革命で発生したものがある。それはまぎれもなく紅衛兵と称せられる政権保衛隊などがあり中国総工会（日本の国会のようなもの）も管理している。

この主流・反主流派が対立しつづける根本の原因は毛・林のいわゆる主流派に対して、劉鄧の反主流派の主張は「経済主義」であるということばで表現されている。つまり毛・林派が、革命的精神「毛沢東思想」を体得することが、生産を促進し、次の大躍進につながる、という考えに立つのに対し、劉鄧派は、物質的な刺激を与えることによって生産を高めるという「経済主義」の路線を掲げて抵抗したといわれている。すなわち、実務第一主義で、これは劉、鄧が意図してつくったものである。また、人民公社政策が後退を余儀なくされた、五九年ころ、主導権をにぎって劉鄧派は、国内では合理的な経済政策、国外では、ベトナムをめぐる世界共産党の統一戦線方式、つまり対ソ協調の方向に傾いたことに、主流派が政治優先主義で抵抗したのが、文化革命でないかとさえいわれている。

この文化革命で発生したものがある。それはまぎれもなく紅衛兵と称せられる政権保衛隊などがあり中国の一群のことである。毛林側は、紅衛兵を、自然発生的なものといっているが、それは、明らかに当然発生的なものであるというのは、上海にいた毛沢東が、六六年六月に、北京大学の聶元梓という女教師に壁新聞をはらせ、つづいて清華大学付属中学の紅衛兵をつくろうというよびかけが出、ついに全国的なものとなった。

ここで毛沢東と劉少奇について述べてみると、毛沢東は、毛主席の威信、毛主席に対する人民の信頼から生まれたもので、毛主席の人つくり教育の開花ともいえる。

東は一八九三年、湖南省長沙の西一〇四キロにある韶山で生まれた。少年時代の彼にこんな話がある「毛の父親は、家人に対してはきびしく、妻の文氏にも、幼い沢東や沢民にも、がみがみとなりつけて畑仕事をやらせ、なかでも沢東はすぐに父に反抗するのでいつもなぐられていた。」それが彼の共産主義に投影していないとはいえないのである。

そして彼は、長沙第四師範学校に入学（のちに第一師範学校に併合）――インテリの道歩まず――一九二〇年、二十八歳でマルクス主義者になり、そのころはすでに、長沙師範付属小学校主事（校長）だった。

また劉少奇についていうと、ちょっと意外であるが、毛沢東と同じ湖南（寧郷―韶山から北へ六〇キロ）の生まれで、彼も長沙第一師範に学んだという説がある。その後劉はソビエトに行き、東方労働大学で労働運動を徹底的に学んだ。そして両者の政治への出発点から対称的である。いうなれば毛は農民を対称とし、中国的風土の中から革命を考え、劉はロシア語を学び、ソビエトへゆき都市工業プロレタリアの組織から出発したのだった。

最後に日本からみると、中共の情勢はひじょうに危険な段階のようにみえるが、中共の一般民衆は、非常におちついているといわれる。理由は毛沢東に対する絶対的な信頼のためだと思われる。いずれにしても現段階では主流・反主流派の優劣がついていないとはいえないのである。

以上いろいろと述べてきたが、中共の激しい権力闘争は、中共が「党内の民主主義」の段階にも達していないことを物語る。中共で主流派と反主流派が争うことをせずに党内の自由な討論採決によって政策をきめる「党内民主主義」が確立されるには、まだ相当の曲折が必要であろう。

（六七年一月二十五日現在）

剣道　寒稽古　行なわる

恒例である剣道の寒稽古の稽古始めが、一月十一日に武徳殿で行なわれた。これより十日間の寒稽古である。参加者は学生と一般人で、一般人は有段者であり稽古の良し悪しについて、注意等を与えてくれる、いわば指南役である。学生の方の参加校は、岩高を始めとして、一高、三高、四高中学では、下の橋、城東で中には岩手女子高の女剣士の姿も見かけた。

一月十四日の夕刻、寒風の中をついて、取材のため寒稽古の行なわれる武徳殿に行ってみた。時刻は六時を少々まわっていたが、練習開始が六時とあって、早くも剣道着に身を包んだ中学生が、場内を素足のまま頬を赤くし、白い息をハァーハァーさせながら、掛声よろしく走り回っていた。高校生の姿はまだ見えなかった。その場内を走っている集団の先頭で、一段と大きく太い声を張り上げている背の高い人に見覚えがあった。その人は岩高の先輩で、三、四年前に剣道で大変な活躍をした人であった。そのうちに高校生も姿を現わし、わななきながら剣道着に着換えていた。その格好は何ともたよりなかったが、いざ、剣道着を身につけ、胴をつけ、面をかぶり、姿勢を正し、竹刀を手にしたその格好には、一分のすきも見当たらなかった。そこへ、中年風の恰幅のいい、腕のたちそうな人が、一人そして二人と現われて、やがて、六、七人になり、その人たちも剣道着なれ、その人たちの剣道着は先はと書いたように、注意等をしてくれる人達だそうだ。聞いてみると、そのうち三、四人は岩高の先輩なそうで、中には、七段の人もおられた。岩高の剣道部にいた人は、卒業してからも、さすがに剣道熱がさかんなようである。そうこうしているうちに、各人の素振りが始まり、次いで、対になって、はなばなしく掛声や竹刀の音をたてて稽古が始まった。

学生たちが真剣になって稽古していたが、それに輪をかけたように、先輩の方達も熱心に、彼らに教授していた。考えてみれば、こんな寒中に、しかも気温がしだいに下がってくる夜中に、仕事で疲れた体でもって教えてくださる、この方たちのお気持ちに私は、頭が下がる思いであった。この方たちは、確かに腕がたつと見て、高校生が向かっていっても、全然歯がたたなかった。何度も竹刀でぶたれ、転ばされても、それにへこたれずに向かっていく、あの高校生の闘志を目のあたりにし、私はしばしの間心をうたれた。

外は一面の銀世界で、うしろにはお城の石垣をひかえていて、古風な建物の武徳殿の中で、これまた古風な、衣装で、稽古している姿を見ていると、何か江戸時代の千葉道場かなんかにでもいるような気がして、柱に身をもたせながら、私もそれに陶酔していた。「ああ、冷めたい」といって、場内の広さからしては小さいストーブにあたりにくる者に、すぐにさまされてしまった。冷たいというのも無理もない、何しろ稽古着一枚なのであるから。「たいへんだなあ」というと、「体は寒くないんだが手足がなぁ」といった。なるほど手足がじかんだように赤くなっている。がストーブにあたるのもつかの間ですぐに、「やあやあ」と声を張り上げて、稽古しに行く姿を見て、うむ、この気迫が、大切なんだなぁと、しろにはしみじみと感じた。彼らのあの気迫が近い将来において、きっと役にたつだろうと思った。

稽古を始めて、二時間近くたってから、やめの声がかかり、それと共にみんな一列にすわり、やがて面のひもをほどきにかかり、面をとった後、一斉に目をとじ、精神の統一をはかった。それから、それにもやめがかかり、先輩の方が立ち上がり、きょうの稽古についての注意や、気のついたことを話され、それにじっと若い剣士たちは、耳を傾けていた。そのうちに、終りの礼がすみ、剣士たちは衣類や道具の整理や、着換にとりかかりながら、きょうの稽古の反省などを話題にして語り合っていた。そこには若者らしい明るさと、一汗流した後の晴々としたものがあった。

会長回想録

長谷川良久

私が、生徒会員の信任を得て、会長となってから、ここ、ずっと、会長をしております。近年、生徒会の不振が言われて、私が会長となって、あまりたいした仕事もせず、任期を終わろうとしております。よく不振の原因は、一般生徒のすが、私の場合は、代議員も良く集まったし、各委員会の活躍もあり、対外的には、目立ちはしなかったが、校内においては、幾分生徒自身の関心が高まってきたと思いました。私も選挙規約を変えて、翌春からは、生徒会を受験に対してもフリーな高校二年生にまかせようとしましたが、同級生達の助言や私自身も良く考えた結果、これには少し時期が、早すぎるような気が致しましたので、規約改正の仕事はしなかった。今ても私の判断は正しかったと、私は信じています。

会長として一番つらい仕事は、故小山先生の葬式の時にし二時間余も正座をして、しびれをきらし歩けなくなったことだった。その外は、協力する者が、多くいて仕事は楽くで楽しかった。とにかく、私としてもベストを尽くしたし、今後の将来に、良い想い出となるであろう。

今年、岩手高校を去られる、高三の皆さんの、限りない未来の成功を祈りながら、ペンを置かせてもらいます。

編集後記

75号を発行できて本当にうれしい。生徒各々が親睦して活発な生徒会活動に盛り上げようとする記事が近年の石桜新聞には多かったこの75号も例にもれず、コラム（桜花）のところで生徒の親睦について取り上げた。このような、いわば一連のキャンペーンをやっにもかかわらず、その効果が現われてきていないのを思うと、今さらながらこの問題が大きくて深いのを感じる。

また、毎度のことながら出版委員の集まりも悪く、何かと委員から不平が出るのにはあきれる。そんなわけで、一人の狭い見解でもって記事を書かねばならないのであるから、本当にいい新聞が出来る訳がない。まあ、このような難問題を宿題にしながら、75号の作成を終えた今の心境には複雑なものがある。

原稿を募集！

次回の石桜新聞又は会誌「石桜」に投稿をお願いします。

内容は、作文・詩・俳句・その他。

石桜新聞についての御意見、御希望でも結構です。

締切りまでに各クラスの出版委員まで。

岩手高校制帽・帽章・ボタン・衿章

学帽専門店

三栄帽子店

盛岡市中央通り二丁目

TEL (2) 5342

夢と希望を支える2大アクション

5日～17日　マデ　盛岡日活　★本券ご持参の方割引　学生 300円のところ 200円

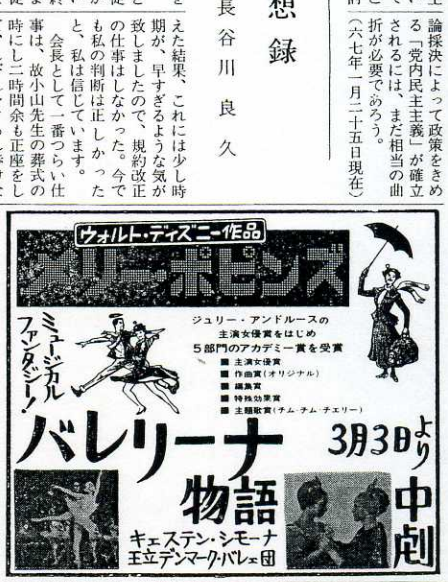
横浜＝ホンコン＝マカオに大ロケーション敢行作品!!

カラー作品　アジア秘密警察

二谷英明　浅丘ルリ子　ワンシャン　ファンイン・宍戸錠

不敵無類！アキラ，ぽん太の痛快アクション

カラー作品　不死身なあいつ

小林旭・東京ぽん太　二谷英明・浅丘ルリ子・内田朝雄

18日→英樹の若親分誕生・宍戸の拳銃は俺のパスポート